

【聖書テキスト】

ルカ福音書 12:35「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。36 主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。37 主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。38 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。39 このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。40 あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

1 自由と不自由

今日の聖書テキストは、5節と短いのですが、「僕」という単語が3回も出てきます。この「僕」という単語は、「奴隷」を意味する言葉です。奴隷制度がない現代日本に生きている私たちは、自分たちを奴隷に譬えるなんて受け入れられないと感じるのが普通です。奴隷は他の人間の所有物、全く不自由な存在です。一方で現代世界では、各人が自分の主人として生きることを勧められているからです。

しかし、自分を主人とする生き方が本当に自由でしょうか。私たちは、自分自身について自分で思っている程には分かってはいませんし、自分の未来についてもわかりません。何が自分にとって最善なのかも知らない。だから、どうしてよいか分からない、結局不安に囚われて思い煩うことになるだろうし、時には自分の欲望に囚われてよくないことを繰り返すようになるかもしれません。また、ものごとがうまくいったとき、私たちは思い上がり傲慢になってしまふ。不安に囚われるにしろ欲望に囚われるにしろ、思い上がり囚われるにしろ、どちらにしろ、私たちは、「自分」という檻の中で不自由に生きる存在であり、自分の限界を超えて自由に人を愛する事も、自由に善き事を行う事もできない、自分のみを主人として生きる自由な生き方、存外に不自由な存在ではないでしょうか。

しかしだからといって、誰か他の人間を『主人』として生きることが非常に不自由で、非人間的であるのは間違いないことです。誰かの奴隷になるとは、現代的な雇用関係、金銭の対価として限定された時間労働を提供する関係ではなく、人格全体がその人の所有物となる事です。主人が人間である以上、知識にも限界があるし無限の愛があるわけでもない。人間の奴隷となる事こそ、不自由の極みでありましょう。

自分を主人としても、他の人を主人としても人間は自由には生きられない。聖書は、そんな私たちに、父なる神と十字架と復活のイエス・キリストを自分の主人とし、神の僕として生きていく道こそ、人間として最も自由な道である、幸福な道であると語ります。今日の聖書テキストもそうです。主イエスは、神の僕として目をさまして生きることの大きな幸せを語っておられます。神の僕として目を覚まして生きるとはどういうことなのか、主イエスの御言葉から聞いていきたいと思ひます。

2 目を覚ませ

今日の聖書テキストで主イエスが繰り返し語っておられるもう一つのこと、「目を覚ましていなさい」ということです。テレビドラマで悪人に騙されている人に対して「いい加減に目を覚ませ」と叱っている場面を見たことがあります。現実とは異なる事を真実だと思い込まされている人に対して、現実にも目を向けろ、目の前で実際に行われている事に気づけ！と言う意味合いで「目を覚ませ」というのでしょう。主イエスの「目を覚ましていなさい」というのも、これと似た意味あいがあるのだと思います。実際に私たちの間で起きている現実にも、真理にも目を開いていなさい…と主は仰っています。

3 神の現実

では、主イエスが「目を開いていなさい」という、「現実」とはなんなのでしょう。それは私たち人間の目に見えるものとは異なる現実です。私たちの目に見えるものは過ぎ去るからです。今現在、私たちが見ているもののうち、どれだけのものが、百年後、変わらずにあるのでしょうか。人間は確実に変わっていきまますし、人間が造ったものだって変わっていくし、なくなってしまう。主イエスは神の御子。主の視野は遠く永遠にも及ぶ方。ですから、主から見れば、人間が見ることができて、「これが現実だ」と信じるものは儂いもの、それらを「現実」とは呼ばないのだと思います。主イエスの現実とは、謂わば「神の現実」。歳月を経ても揺るがない現実。「真理」です。

決して揺るがない神の現実とはいったいなんなのでしょう。そんなものはあるのでしょうか。イエス様はこうおっしゃっています。「**天地は滅びても私の言葉は滅びない**」(マルコ福音書 13:31)。

そう、神の現実とは、先ほど、イエス・キリストその人。謂わば共に告白した使徒信条の内容そのものです。天地万物の造り主、全知全能の父なる神によって造られた私たち人間。神を愛し自分を愛し人を愛するように…と造られたかけがえのない命。しかし、私たち人間は、この神の現実から目を背け、自分達が神になりたいという欲望に目を塞がれてしまい、罪を犯してしまう者。にも拘らず、神は、ご自身に敵対する私たち人間の為に、御子イエス・キリストを完全なる人としてこの地上に遣わした。私たちの罪を負わせ十字架に磔にする為に。そして、私たちの罪を赦したのです。御子イエスは父なる神に従い通し苦しみ抜かれて十字架の上で死なれた。その骸は墓に葬られましたが、主イエスは、三日目に死人のうちより父なる神によって永遠の命へと甦らされました。そして、父なる神のみもとに帰って行かれたのです。しかし、それで終わりではありません。いつの日か再び、イエスさまは私たちのもとへとやってきてくださる、そのとき、神の国が完成する。神のご支配が私たちのうちに完全に行き渡る。その主イエスの再臨の日まで、弱い私たちがキリスト・イエスの言いつけに従っていけるように、助け手が与えられました。霊なる神である聖霊。聖霊さまが私たちの心のうちにやって来てくださり、私たちは神さまのものとなった、キリストのものとなった。

これこそ神の目から見た揺るぎない現実であります。私たちは皆、神のものなのです。私たちの肉体的な目では、この神の現実を見ることはできません、知ることはできません。信仰的な目でしか見ることができない神の現実です。この神の現実に対して目を開いていなさい、目覚めていなさい、目覚めて神を知りなさい…と主イエスはおっしゃいるのだと思います。

4 帯を締め、灯火をともす

神の現実を目を注ぎつつ生きる事を主イエスはこのようにおっしゃいます。35節「腰に帯をしめ、灯火をともしていなさい。」当時のユダヤの人々は、とてもゆったりとした衣服を身につけていたようです。そのままでは機敏に立ち働くのに邪魔になります。ですから、僕達は、腰に帯をしめ、あまった布地をその帯の中にたくし入れて素早く働けるようにしていたそうです。少し前の日本で言えば、和服を着た人が料理や掃除をするときに襷をかけて着物の袂をたくしいれるようなイメージでしょうか。そのように働く格好をすると、不思議なもので、内側まで、心身ともにシャンとするもの。

そして、ここで主イエスが「灯していなさい」と仰るともし火は、主人の足元を照らす為のともし火です。まさに「腰に帯をしめ、ともし火をともしている」とは、主人を待つ僕の姿であります。主人が帰って来て戸を叩いたら、すぐさま開けるよう待っている僕。それは、大好きな大好きで仕方ないご主人を待っている僕の姿です。勿論、この主人はイエス様その人です。

5 婚宴から帰り

しかし、どうしてここで、婚礼の宴が出てくるのでしょうか。一つは、婚礼は非日常的な喜びの宴であるから。主人はこのうえない喜びの宴に連なっています。そして、家で待つ僕達にもこの喜びを伝えたい思い、家路を急ぐ。僕達は、そのように大きな喜びをもって帰って来る主人を待っているのです。また、別の意味もあります。当時の婚礼の宴はいつ終わるとも分からないくらい果てしなく続いたようです。現代のようにホテルで二時間ほどの披露宴ではありません。つまり、主人は婚宴からいつ帰って来るか、僕達には予想できないのです。38節に「真夜中に帰っても、夜明けに帰っても」とあるように。このように夜を徹しても、目をさまして待ち続けることができる僕は幸いである…と主イエスは仰っています。

6 僕となった神の御子という現実

その幸いは途方もないものです。なんと、主人の方が、ご自身の奴隷を食事の席に着かせ、給仕をしてくださるというのです。異常事態です。この給仕をする主人の譬えから、多くの人がヨハネ福音書13章の場面を思い出しています。私も思い出しました。ヨハネ福音書13章にはこうあります。「イエスは、この世から父のもとへ移る時が着たことを

悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」(ヨハネ福音書 13:1)。
主イエスは、十字架を前にして弟子たちとの最後の食事をとるのですが、その前に、主は上着を脱ぎ、手ぬぐいを腰にまとして弟子たちの汚れた足を洗っていただきました。人の足を洗うのは、奴隷の仕事、それも自分たちと同じユダヤ人の奴隷にはさせられない、外国人の奴隷にさせていたような仕事でした。そのように最も低いところまで降りて人に仕える姿を、イエス様は弟子たちにおみせになりました。そうして、人々の罪の汚れを洗い清め、新たに生かすために十字架で死に、復活することを、彼らにお示しになったのです。もちろん、弟子たちにそのことが分かったのは、主イエスの甦りの後のことです。

だから、実は、いつも目を覚まして待っていてくださるのは、私たちではなく、神の側です。まどろむことも眠ることもなく、いつでも私たちに必要な糧を与えようと待っていてくださるのは、ともし火をともして待っていてくださるのは、主イエスであり、天の御神であり、霊なる御神。それが神の現実です。そして、目を覚ましている者だけが、この神の現実を見い出すことができます。神の御子が私たちのことを命をかけて愛し抜いてくださる。目を覚ましていて、その圧倒的な神の現実を見ることができる僕は幸いだと、主イエスは言われるのです。

7 目覚めて神を知ること

そのような幸いに生きた方の中にM. F兄がいます。これは兄の葬儀でも話したのですが、M. F兄の後半生は、難病との闘い、苦しみの連続でしたから。確かに、人の目から見ればM. F兄のお身体は病んでいたと言えるでしょう。しかし、神から見ればどうでしょうか。M. F兄は、ご自身の病を通じて、神の現実に目覚めておられたのだと思います。病による癒し難い苦しみを実際に経験している兄は、イエス・キリストの痛みや痛み、悩みをよりはっきりと知ることができました。自分が今、実際に呻いている痛みや、眠れぬほどの痛みや悩みの何十倍、いや、何百倍の痛みや苦しみをイエス・キリストは耐えて下さった、誰のために？この自分の為に。それ程までに深く強く大きく広く、この自分を愛して下さっている！どこか遠くの抽象的な神を想像し、頭の中で理想的な神の愛を思い描いたのではありません。実際の自分の痛みにより、苦しみを通じて、病を通じて、M. F兄は、十字架のイエス・キリストと出会い、深い深い神の愛を知った、経験したのです。そして、神の現実に目を開かされたのです。キリストのみ苦しみを通じて神を知ることによって、M. F兄の痛みや苦しきは、聖なる痛み、聖なる痛みとなりました。キリストが、兄の痛みと苦しみをご自身のものとしてくださったから。だから、M. F兄には、キリストの平安が与えられました。病に押し流されない確かな喜びと平安の内にキリストに支えられて生き、死んだのだと私は思います。このように、この闇の地にあっても、神の現実に目を開かれ、目を覚ましている人は、誰よりも幸いなのです。

8 主イエスの来臨

さて、「主イエスが目を覚まして待っている僕は幸いです」といわれているのは、主人の帰ります。この主人は、言うまでもなくイエス様です。十字架と復活の出来事のあと、父なる神のみもとに帰って行かれた主イエスが再びこの地上に来られる時、それは終わりの時だと言われています。その終わりの時、主イエスは死の遥かむこうから、死の彼方から私ども人間のところへとやって来られる、そして死にたる者の名前を呼んで起こして下さる、その甦りの主イエスが再び私どものところに来る時、私たちは顔と顔を見合わせてイエス様をはっきり見ることができる。そのときを待ち望みなさい…と主イエスは仰っています。イエス様がいつやって来るのか、終わりの日がいつくるのかは、誰にも全くわかりません。わかりませんが、その日は必ず来るから諦めずに待てというのです。

9 再臨の主への希望

私どもの教会は、昨年二月に二見美枝姉妹、三月に鈴木田鶴子姉妹、そして八月に下條君江姉妹、そして先週、M. F雅博兄を葬りました。キリストを信じて亡くなられた方の葬りをする時、牧師は「この者の命は死で終わる命ではない。死を超えた彼方から、主イエスが再び来られる。地に生きている我々も、死の床についた者たちも、その主イエス・キリストと顔と顔を合わせてお会いするのを待ち続ける」と聖書を取次ぎます。終わりの日、甦りの朝、再びやってきてくださった主イエスが、死にたる者の名前を呼び、手をとり、永遠の命へと起こして下さる、その終わりの日の希望に生きることを伝えるのです。そして、教会は、葬儀の時も、茶毘にふす炉の前でも、遺骨を納める墓の前でも、「私は死を超えて再びやって来る」と仰る主イエスの命の約束のうちに自分たちの愛する者の身体を置くのです。この再臨のキリストへの確信のないところでは、教会の業を支えるべきものは何もありません。

ですから、この地上に生きる我々には見えにくい神の現実が最も鮮やかに姿を現すのが、教会が執り行う葬りの時と言えるでしょう。そう、信仰の仲間の葬り、教会の葬りのとき、私たちが何をしているかという、腰に帯を締め、ともし火を高く掲げているのです。腰を帯に締め、ともし火を掲げ、死の彼方から再び来られるという永遠の命の主イエス・キリストを待っている群れであること、を高らかに世に知らせるのです。永遠の命への希望の光を闇の世にかかげる群れが教会です。

10 エマオ

このともし火は、私たちがともしたものではありません。主イエスがともしてくださったもの、聖霊による炎です。主イエスが35節で仰る「ともし火をともし」の「ともし」という単語は、珍しいギリシャ語であり、ルカ福音書で使われているのは、今日の35節ともう一箇所、二箇所だけだそうです。もう一箇所はルカ福音書24章、エマオへの道行のエピソードで出てきます。主イエスが十字架刑で無残に殺されてから三日目。弟子たちは、主が

十字架に掛かって死んでしまったことにすっかり怖気づき、落胆します。そのうちの二人は、希望をなくし故郷のエマオに戻ろうと暗い顔をしてとぼとぼと帰って行きました。その二人を、甦りの主イエスは追いかけてくださったのです。でも、彼らの肉眼には、それがイエス様だとは分かりませんでした。肉眼は開いていても、信仰の目が覚めていなければ、目の前に復活の主イエスがおられても見えません。そんな二人に、イエス様は、聖書全体を解き明かしつつ、救い主は十字架にかかって三日後に復活されていることを語ります。しかし、それでも彼らの目は開けません。

とうとうエマオにつきました。先を行こうとするイエス様を二人は家へと招きます。そこでイエス様はお客様でしたが、まるでその家の主人のように振舞われます。二人の弟子の目の前で「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。」のです。「すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」とルカ福音書にはあります。二人はこう言います。「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか。」—この「燃えていたではないか」が、「ともし火をともし」の「ともし」と同じ単語なのです。イエス様によって彼らの心の中に「ともし火がともされた」からです。消えていた信仰の炎が燃やされ、神の現実へと目が開かれた、目覚めさせられました。だから、彼らは喜び、感謝、希望に溢れてエルサレムに帰り、そしてそれから五十日後には聖霊の炎に燃やされて、十字架にかけられたイエスを救い主と告白する証人とされたのです。

11 聖霊のともし火をかかげる

聖霊によって神の現実へと目が開かれて、その恵みを知っていきることが出来る者は、心の中に決して消えることのない火をともしられます。聖霊のともし火です。そして、甦りの朝の現実、神の現実、今、地上にあって生きる者と変えられるのです。この地上の現実の中に、罪の闇の中にも、日々新たに神の現実を見出すように導かれる者、そして、日々新たに作りかえられる者とされます。そうしながら、やがて来たり給うイエス様を待つのです。それは、愛する主人の帰りを待つ喜びの僕の姿です。主の愛に生かされ、主を愛する喜びに生きる僕の姿です。そのようにして、この闇の世にあって、甦りの朝のさきがけである光をかかげるのです。この光のもとで、神の現実、神の自由に生きる群れとされたい、横浜ナザレン教会でありたいと切に願います。